

高大連携講座～「現代のヨーロッパを学ぶ1」

1日目：徳原拓哉（鶴見） 2日目：福本淳（栄光学園） その他：中山拓憲（舞岡）

はじめに

恒例の高大連携講座を2019年度も行いました。8月8日から10日の日程で鎌倉学園高等学校を会場としてお借りしました。この講座は、午前中は、高校（60分）と大学の教員（90分）が同じテーマで高校生に対して授業を行い、午後は高校・大学の教員が研究協議を行うという形で行っています。今年度は、戦間期のヨーロッパを題材に行いました。授業者の方々が、歴史総合を意識していたのかとも思いますが、どの授業も「大衆化」を意識したものでした。戦間期のヨーロッパでは「大衆化」は避けては通れないのかもしれませんが。

この講座では、高校生に参加していただき、受験勉強や教科書で習う世界史とは、違う最新の研究を踏まえた世界史に触れて、「歴史って面白い!」、「こういうことが学べるなら大学って面白いかも!」とさせていただくのが大きな目的です。ただし、それだけではありません。高校の先生方が、最新の研究に触れて（ただ面白いと思うのではなく）授業に生かしていただくことも大切な目的だと考えております。

そこで今回は、スタッフで相談して、新しい試みを初めました。3日間通じて教員のグループワークを行いました。午前の授業内容を踏まえて、授業で使える「問い」をグループで考え発表するという内容です。批判の多い「考える授業」ですが、知識をきちんと獲得した上で行えば、面白いものになることが実感できました。また大学の先生方に、高校の授業の一端を示すこともできたと考えております。これによって来年度以降の高大の連携が、より密接なものになることを願っております。それでは3日間の授業の様子を、紹介します。パートごとに執筆者が違うので、文体が違うことをご容赦願います。

1、1日目：8月8日「現代のドイツをどのように学ぶか」

[高校：徳原拓哉（鶴見大学）、大学：小野寺拓也（東京外国語大学） 報告執筆者：徳原]

1-0 はじめに：論点と問題意識

1日目は、東京外国語大学の小野寺拓也先生とともに、「現代のドイツをどのように学ぶか」という点で共同授業を行った。我々の問題意識は、「歴史の中の感情」にあった。特に、「ふつうの人々」がいかにしてナチズムという現象に参加していったのか、この問題点を生徒とともに考えることに授業の狙いを置いた。

特に、小野寺先生は、『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」—第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』（山川歴史モノグラフ）2012/11/1をご出版されている通り、エゴドキュメント（日記などの一人称で語られる資料）を用いて、市井の人々の感情がいかに戦時という状況の中に動員され・参加していくのかを扱われるということで、主に私とその前提となる33年までの時期を、そして小野寺先生が、ヒトラーが政権掌握をしてからの時期を扱うこととなった。

1-1 授業

当日の授業においては、高校教員と大学教員の授業運営の仕方の違いが対照をなしていたように思われる。私の授業の目的は大きく2点だった。1点目は、教科書記述の比較を通じて、ヒトラーが首相

に任命されていた 1933 年には、実際にはナチ党が前年の選挙で後退し統制を衰えさせていたことに気づき、小野寺先生の授業への橋渡しをすること。もう 1 点は 40 人を超える大人数でのインタラクティブ（双方向的な）な授業形態を開発することである。

今回は、パパパコメントと呼ばれるコメント投稿サイトと Twitter を連携させながら、生徒の記述や声を常にスクリーンに投影し続ける手法を用いた。コメント投稿に対する匿名性の担保と、それがスクリーン上に投影されるという透明性から、危惧していたほどにコメントが「荒れる」ことはなく、手法としての可能性を感じた。その一方で、プリントに記入しながらコメント投稿や Twitter に投稿といった、1 時間で複数ツールを使うことに対しては、限界もあった。

小野寺先生の授業では、問題意識を受け、ヴァイマル共和国時代における「帝国」の残滓、特にヒンデンブルクを代表とする保守勢力の思惑と、それに相乗りしてゆくナチ党の「キマイラの性格」、そしてそのキマイラ的な性格と親和的であった、ヒトラーを中心とした絶対的意思が貫徹した組織体というパブリック・イメージとは異なった、多元的な組織性がナチ党の党勢拡大に寄与していたことが強調された。特に後者に関しては、ナチ・イデオロギーは①「民族的共同体」思想、②「指導者ヒトラー」という“媒体”の不可侵性、③社会ダーヴィニズム的な「闘争」思想という中心的なイデオロギーのほかには特定のイデオロギーを持たず、むしろ実態の組織運営においては、個々の権力集団がせめぎあう、「権力のカオス」状態であったこと、その「下からの欲望性」がナチ体制を支えていたことが明らかにされた。

1-2 午後の研究協議における議論

午後の議論において、興味深かった議論は、現在のポピュリズム的な世界が、果たして全体主義の再来といえるかという議論が多く上がったことだろう。それは高等学校の歴史教員という「あの時—あそこ」の出来事を「今—ここ」で生徒と考える立場にいる人間が持つ危機感から発せられたように感じられた。

小野寺先生からは、教員・生徒を含め、広い意味で歴史を学ぶ人々を歴史家とするならば、そこにはやはり歴史家としての思考が必要であって、社会学や政治学の分厚い蓄積がある「現在」という領域に安易に踏み込むことは避けなければならない。ただし、歴史家として今を語る実践というものも実際には受容されているのであり、その一つの成果として、板橋拓巳『ナチズムは再来するのか?: 民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓』が紹介されていたことを最後に付言しておきたい。

2、2 日目：「現代の北欧をどのように学ぶか」

[高校：福本淳（栄光学園） 大学：古屋大輔（大阪大学） 報告執筆者：福本 淳]

2-1 授業

午前前半：高校教師の部は、私（福本）が担当した。古谷教授との事前の打ち合わせにしたがい、社会経済史の講義を聴くための最低限の知識として、18 世紀的な資本主義、ニューディールにより誕生した 20 世紀的な資本主義、そして社会主義の三つの経済思想の内容を歴史の流れに沿いつつ確認した。また第 2 次世界大戦中の北欧史を簡単に説明し、戦争中の経験が、北欧各国の戦後のスタンスに大きな影響を与えていることを指摘した。

午前後半：研究者の講義は古谷大輔先生（大阪大学教授）が担当された。テーマは「スウェーデン福祉国家はいつ誕生したのか」。古谷先生は、よくいわれる 1930 年代の世界恐慌期ではなく、むしろ第 1 次世界大戦直後だと主張する。この戦争においてスウェーデンは中立を貫くことには成功したが、

海外からの食品輸入が重要な同国において、大戦でそれが滞ったことは大打撃であり、国民の緊張や不満は高まった。そして政府が国民生活や経済に介入・統制をおこなうこととはじまった。またロシア革命を見た労働者の中にも、社会主義革命ではなく穏やかな変化がよいのではないかという意識が強まり、社会民主党が声望を高めた。さらに戦争が終わると、スウェーデンの企業は参戦国の戦後復興に関与して利益を上げた。こうして社会民主党系の政府による所得再分配重視というモデルが誕生したのだ。1930年代には世界恐慌が北欧にも波及するが、政府は湖の干拓などの公共事業で失業者を救い、社会民主党はますます国民の支持を集めて、議会の過半数を制するようになる。従来言われているスウェーデン福祉国家の誕生は1930年代だという言説はこれを指すが、芽を吹いていたものが大きく育った、いわば「確立期」というべきであると古谷先生は言う。

最後に、講義ではスウェーデン社会福祉政策の闇の部分にも触れられた。福祉国家がうまく機能するためには多くの公的資金がなにより必要である。このため担税能力のある「質の高い国民」（古谷先生もこの言葉を口にするとき「いやな言葉だけど」と前置きをされた）が必要だと考えられた。このためスウェーデンは国民の「稼ぐ」能力を開発することには余念がなかった。この延長線上に、稼ぐ能力のない人間は、いなくていいという歪んだ発想が生まれ、強制断種が法制度化されていった。古谷教授はここで、独裁国家推進した断種政策ではなく、民主的な国家で国民の多数の賛同を得て実行された断種は、より罪深いのではないかと問題提起されていた。講義全体の印象として、古谷教授の深い学識、さわやかな弁舌、その根底にあるヒューマンイズムに改めて感謝と敬意を感じた。

2-2, 午後の研究協議における議論

午後の部は、生徒を帰宅させ、教員たちで古谷教授を囲んでの勉強会が行われた。学識豊かな古谷教授にたいして様々な質問も飛び、ヨーロッパ福祉国家の2類型（社会民主党系の政党がリードし、税金を使って全国民を一律にケアする方式と、保守系/キリスト教民主主義系の政党がリードし、家族や職場の団結を重んじて保険制度などが中心となる方式）に話がおよんだ。またグループワークも行われた。

3、3日目：「現代の中東欧をどのように学ぶか」

〔高校：牧野一高（静岡県立藤枝東） 大学：中澤達哉（早稲田大学） 報告執筆：中山拓憲〕

3-1 授業

午前中前半は、静岡県から来ていただいた藤枝東高等学校定時制の牧野一高先生に授業を行っていただいた。牧野先生は、生徒の目線に立った授業をする先生で、生徒の主体性を重んじる授業をした。具体的な授業内容は、第一次世界大戦後の「民族自決」は本当に中東欧の人々にとって良かったのか。また、多くの国々が独立したのは事実だとしても、それは「民族自決」と言える内容だったのかということを生徒に考えさせる授業であった。「なぜ「民族自決」で生まれ変わった中東欧は、ドイツに抵抗できなかったのか」という問を提示した。授業ではジグソー法が用いられ、政治、経済、国民（民族構成）の各分野を生徒に分担させ、チェコスロヴァキア、ポーランド、ハンガリー、ユーゴスラヴィアの各分野の状況を、配布した資料を基に調べさせた。その上で、違う分野を担当した人同士で話し合って答えを考えるという授業であった。多くの民族が存在する中東欧における「民族自決」とはあくまで一部の民族にとっての「自決」に過ぎず、多くの民族は国家への統合を強いられました。経済面でも工業が未発達な国が多く、自立が難しい状況であり、政治面では人々の支持の元、一人の人間に権力が集まる権威主義体制や、独裁が多くの国で行われた。野先生の授業で、私が驚いたのは、牧野先生が、生徒に「無理にグループを作らなくていいし、一人でもいいよ」と強調してい

たことである。生徒に主体的に取り組む授業で、様々なことが強制されることがあるが、牧野先生はあくまでも生徒の主体性を重視していた。

午前中の後半は、早稲田大学の中澤達哉先生が授業を行った。中澤先生の授業は、ハプスブルク統治下のハンガリー＝オーストリア帝国では、各地域と君主の合意のもとに統治が行われていたが、大戦後、独立したチェコスロヴァキアでは「搾取的な中央集権体制」が行われ、スロヴァキア人にとっては合意のない国家だったという内容であった。知識人たちはスロヴァキアの独立を目指し、中世の大モラヴィア国をシンボルとして用いて大衆を統合し、1939年にスロヴァキアは独立を達成したと話された。両名の授業からわかったのは、中東欧における民族自決は、あくまで一部の民族の自決に過ぎず、多くの少数民族は犠牲になったということだ。3日間共通して話されたのは、「大衆化」とは、多数が集団として政治に強い影響を与え、しかも多数であるがゆえに正当化される一方で、少数者が犠牲になる面を含むということであり、これは現代にも続く問題だと感じた。

4. 午後の研究協議

午後の研究協議については、各日の執筆者が書いているが、1日目と2日目の研究協議に関しては委員である上野信治先生が記録を書きおき、また最終日には、先生方にアンケート（22名）をとったのでその内容をもとに、ここでは研究協議の様子をお伝えしたい。

午後の研究協議は、今回からであるが2部構成で行っている。1部は、生徒、教員から集めた質問に対して授業者が答えるというものである。午前中の授業は、あくまで高校生向けのものであるから、細かい内容や難しい内容、研究史上の論争などは扱われない。そこで、午後の研究協議で授業内容が、質問によって多面的・多角的にあぶりだされていく。先生がたのアンケートを見る限り、21名が「とてもよい」、「よい」と答えていたので、かなり好評をいただいていると考えられる。質疑応答をいくつか抜粋して書いておく。

[1日目]

問B ナチ党は社会主義と資本主義を両方批判した。ナチズムは社会主義なのか、資本主義なのか？

答B 国が主導して経済を統制するのが当時の世界の主流であり、その二元論は難しい。

問C ホロコーストについてはナチズムへの賛同ではなく、周りに同調していただけというのは日本と似ているのでは？

答C その通り。最近の学説で「参加の独裁」。必ずしもイデオロギーに同意していなくても、俗物的なものが参加の理由になっている面がある。ナチスの恐ろしいのは、動機は問わないから参加を求める。

問D ドイツでは今もナチスの反省を行なっているのですか？反省は続けるべきか？

答D トルコ系の人がたくさん入っているが、彼らに反省しろというのは難しい。ドイツの国是としてやっている歴史教育を、彼らにどのように行うのか。過去に対する記憶・反省が最近おろそかになっている。当事者じゃない人に、または当事者じゃない人が過去をどう伝えていくのか。

[2日目]

問E スウェーデンは対戦中に中立を保っていたというが、どうやって？

答E 中立の維持は非常に困難があった。ドイツ側に協力を求められた事実もある。風見鶏外交。兵士の保護など、イギリス・アメリカに協力することも。小国が中立を維持するために、バランスをみた外交、距離感を保つ方法をとる必要があった。

問F スウェーデンはが他国を植民地することはあったのか？

答F スウェーデンにとっての植民地は海外交易拠点程度のもので、面として獲得するようなことはしていない。

問G 消費税 25%に対する反発はないのか。基礎研究に対して投資できるのはなぜ。

答G 配分や使い手などが透明で、使い道がわかっているから、高いとは思っていない。スウェーデン人は自分たちが稼ぐための手法を理解しているから、先を見通して基礎研究分野を疎かにしない。

2部では、「はじめに」で述べたように、先生方のグループ学習を行った。高校教員の授業、大学教員の授業、午後の研究協議における質疑応答をもとに、グループで話し合っ、授業で使える「問い」を考えるとというものであった。その問いを用いて授業展開まで考えていた班もあった。新科目「歴史総合」の授業では、「問い」を中心に授業が行われる。問いを作るためには、この講座の様な質の高いインプット（学び）が必要だということである。

アンケートを見ると回答者 17 名中 13 名が「とてもよい」「よい」と答えていたので、おおむね好意的だったと言っている。発表についても、こちらが指名する前に、各グループが積極的に発表していた。ただし、理由は様々であろうが途中で帰った先生、指示が分かりづらいと言っていた先生もいらっしたので、課題はあると思う。

5. 今後に向けて

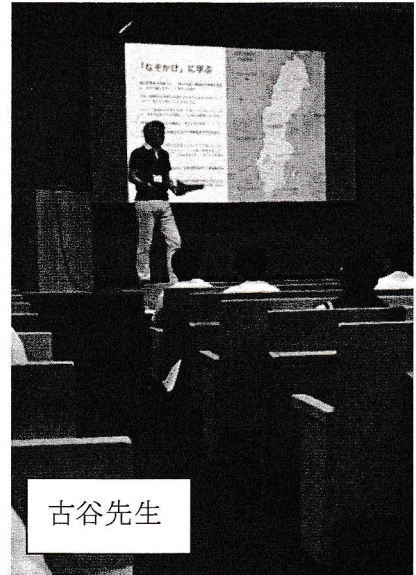
授業を行っていただいた先生方、参加していただいた生徒の皆さん、先生方に感謝申し上げます。特に講師探しから含めて、お願いしている古谷大輔先生、この講座が始まった時からコーディネーターをお願いしている桃木至朗先生には特に深い感謝を申し上げます。なお本講座はNPO 神奈川歴史教育研究会の協賛をいただいております。こちらにも感謝申し上げます。今後、多くの生徒、教員の方々に参加していただけるよう、さらなる改善を行っていきます。参加いただくとともに、様々な意見をいただければと思います。



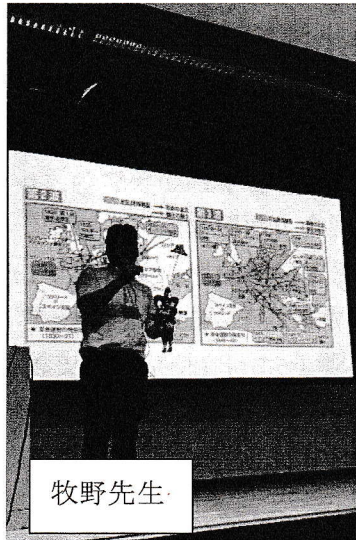
徳原先生



小野寺先生



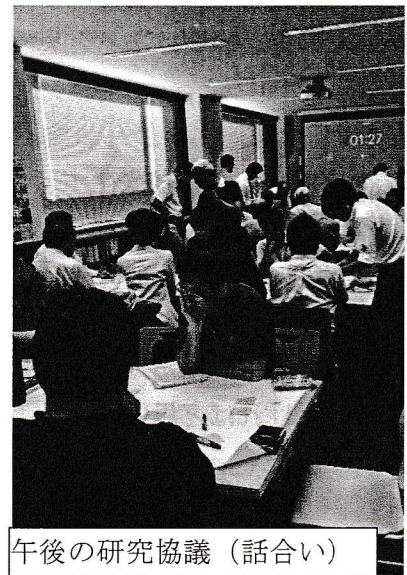
古谷先生



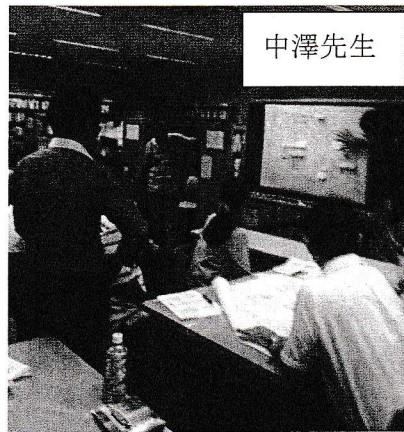
牧野先生



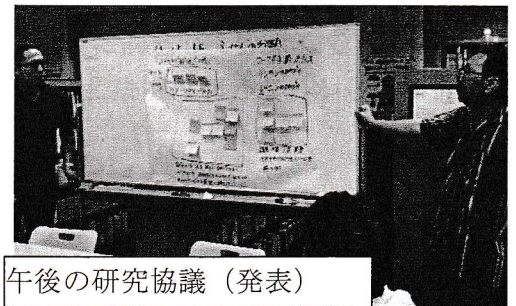
生徒の活動



午後の研究協議（話し合い）



中澤先生



午後の研究協議（発表）